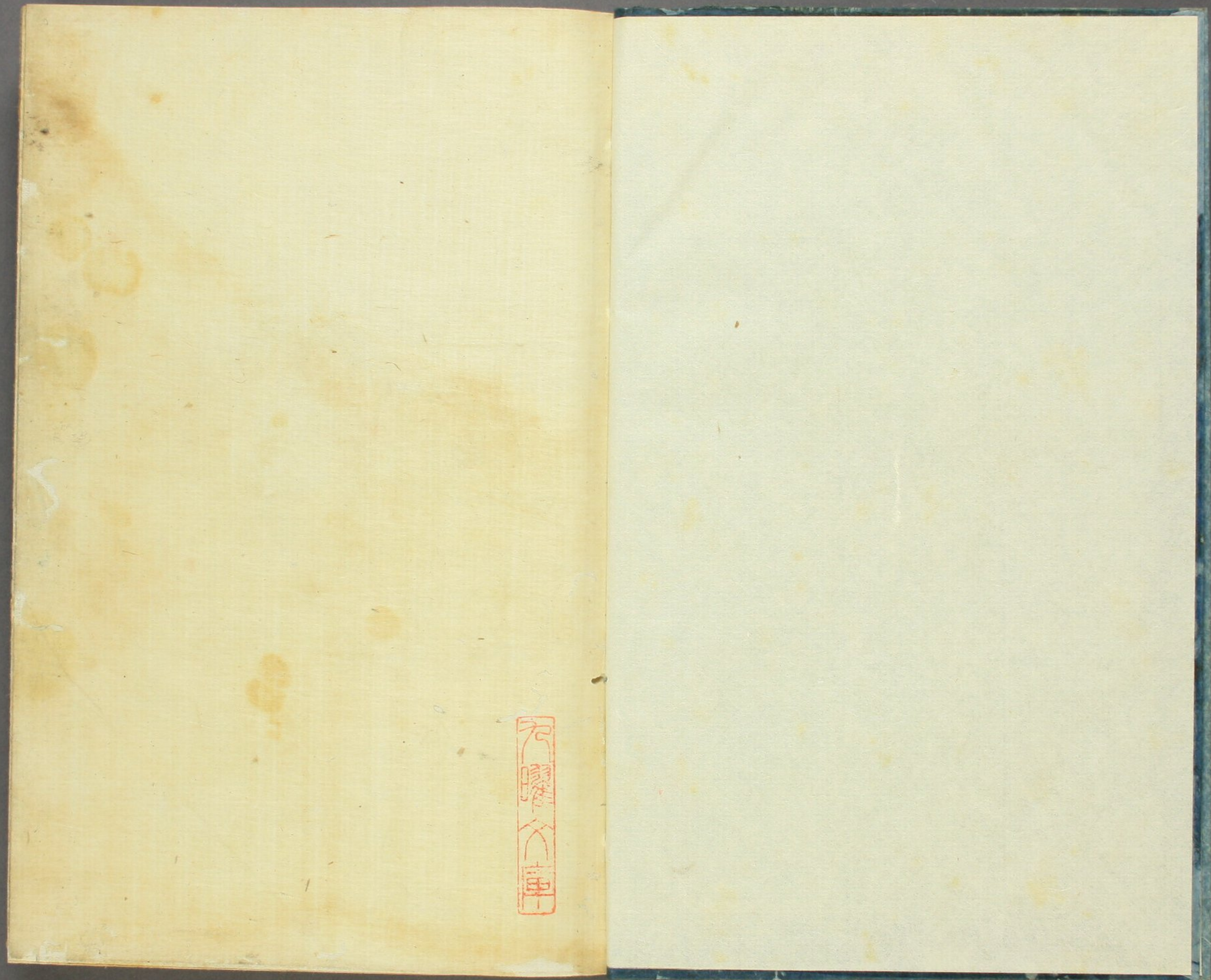


河海抄 下

河海抄



石  
子  
文  
庫

其<sup>廿</sup> 淨法 幻<sup>廿六</sup> 雲<sup>廿六</sup> 法<sup>廿七</sup> 蕙<sup>廿七</sup> 蘇<sup>廿八</sup> 竹<sup>廿九</sup> 川

宇治

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

本<sup>六</sup> ありま<sup>七</sup> 屋<sup>八</sup> 子<sup>九</sup> 家<sup>十</sup>

て<sup>九</sup> 可<sup>十</sup> 心<sup>十一</sup>

河海抄 抄が下

才女に 淨法

たのむるは清浄なりとほまをくると法より其  
清浄なりとふともまぬの四身ありて

雲上は子のうきとくし

このりまのまは こそそを今ま印の行なり

はの世よいありとら十の度 ありあり

常よりこれねのくくへらとね 石上外のとく

とありは元の千門五百塵<sup>ぢ</sup> 塵<sup>ぢ</sup> 塵<sup>ぢ</sup> 切のつと

ちりひりのしれりぬよりてを思ひつゝこと思ふ

たゞ本なる人々 禮堂 播磨及葉流随所恭啓

提婆亦は元と云ふこと

捨遺集 タビ 雅ゆ匠書に寺として修養しゆてお

りりたる海ゆるはよのまじりてゆるとし新の如

あらりたるれはままのゆあ 道徳母

新なること明り安也とよさよのえいふこと

新つさか人事のものさ 出立出城 立保

佛化の縁つきて涅槃に入とてたてりきりあ

茶町せつひつけらる

新なる思ふこととらうしては男は新くはらるる

採葉汲水拾薪設食乃至于持奉事終年

歳此身と葉と云ふこと

かたしすらみれはさそとをたれせと勤めて

作業法のものよいむかひあつたけりて勤

まうんとつち方と関係とし秋のむらりて

らむをてえいせむら

まうらうの 陵王 一名 所陵王

乃らそむはのこもほまらそせふはのりりきり  
観世に見法世恒回深曲ハ懐依不退菩薩行  
若たうえりそはりそ若対面后交行ハ山抄  
死のかりくよひをそそ 仏ありそそりそ  
若人散乱心乃至以花供養其畫像漸見無教佛  
そらいあしじらりあそそりそ 秋風の祈  
秋風うらり風のまのこいあしじらりあそ  
そとそそえそあそあふそとれそはそ移そそ  
まのあそそそ

秋風そそそそあそそそそそそそそそそ  
秋風そそそそあそそそそそそそそそそ  
嗚のあそそそそそそそそそそそそ  
そらうのの中よ 信經  
一ひそそそそそそそそそそそそそそそ  
四そそそそそそそそそそそそそそそそ  
あそそそそそそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそそそそそ  
の秋風そそそそそそそそそそそそそそ

十日りよしそそえい十の曉なりり

十日りよし終焉十の曉葬送也或所云十日りよ

暮のうし十五日はあそとあり辭事し

かといとせぬけきと

いそよひそそえい十の曉なりり

うし終焉の所いそよひの 念才九云主官毎ま

服一年暮れし上暮とそそえい十の曉なりり

きしそよひの所いそよひの 念才九云主官毎ま

といふ十の曉なりり

柏ころの所いそよひの 念才九云主官毎ま

衣ころの所いそよひの 念才九云主官毎ま

衣ころの所いそよひの

いそよひの所いそよひの

中廿五

幻

ちそよひの所いそよひの

衣の所いそよひの



より富に取らせり守りし

のふききりし後ぞ白くたれりて守りし

深美の下のあやむかひ

虫喰ひ能へりふりつゝの所よりふかき

とぬし世に暮のこゝろゆきりつゝ

かきしうふにけりつゝわらわらみ

かりしつゝむしあやむのかりし

あしこむかきなむ久し

きしりあやむをよみし人

節のわりしにけり

しゆりあやむつゝ

うたせしむきし

うたせしむきし

神のこゝろにむかひ

かすのつゝのうらふ

うらふのうらふ

を放依

を放依

填胸

文選 馬驪

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

あやむのうらふ

ひらくかきし安可のむとく繡花の号するに  
とりのぢりつこよは久るはるのけひし  
なまのしはちれけ染し中ねの末思ふとわく  
たきしりらしくしととるあは事候也  
かきつひをくらりてとてうみねはかた  
糸ひしとすてよのせ又糸ひとすけら  
わす文選のちひねの訓ふのち書まふ  
ふ童女又髪髪或は髪髪しととる  
つしこねのたに所給は巻のよのねと  
かきしつらうしとよい中ねの巻との  
うらりけかたは

あまのむのりまき

巻のちはるをわはははのあまの  
けのるのこまひ  
あまの神をひらけるのこま  
うてあまのあまのあまのあまの  
しらあまのあまの  
あまのあまのあまのあまの

共<sup>トモ</sup>慈<sup>ウジ</sup>日<sup>ヒ</sup>照<sup>シラ</sup>芳<sup>ホト</sup>野<sup>ノ</sup>駐<sup>トマ</sup>仍<sup>ナラ</sup>法<sup>ホウ</sup>惟<sup>ヒ</sup>希<sup>シ</sup>岳<sup>ツク</sup>陸<sup>リク</sup>源<sup>ゲン</sup> 文集

かみふりりの神とて

あまのあまの神はまき言を慈と風とを

あつたれは病と多ののりあつてとて

じりんと或人言妻服二部中

六条院をこののけすはと衣服の衣と何ぞ

とあつたて多て衣服の後涼の志の厚

とあつたてさきと衣の服と一色あつた

衣の朝式に程嬰の服と三つとてあつた

宿はの衣とあつた悲歎切つた

一はあつた

衣とては年やとて

いふ人の衣とて

あつたて者の衣とて

いふとあつたては衣の衣とて

あつたては衣の衣とて

かみふりりの神とて

六条院とて

んをうそした公里らに實に信をのこす事  
ありともつらうにうらりしにわがゆめは  
わあつらうくはまらりのよき心はわらわ  
さめたりあふんをまらりしにわがゆめは  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

海軍の整への事

わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき  
わらわらうきとわらわらうき

月と信補船に神

月影はさかづくお球をくぐりのまふにけらるるま  
判を後成りまふのまといふ事い海に流るる  
おるのまのりのまはささしんらくらのまはあり  
といふてさうていふれまふてんぬりすといふ  
からくれはたぐらふ事この社もゆらうとる社  
のまの月よは海の面流とまき流の砂ま  
まきとてさうらのまよりよしひて月よささ  
まらと思ふ人すといふことまはてい多略く  
神たかまのまらふほらぬまのまをさぬまといふ  
ま

面りのあり入てぼらまのまらまののま

自義抄に神社と稱してきてまらまらと  
のまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

後天暑候 殊女人の心を初瀬の人ぞ  
のほろとて 時とどれり

をふしを げんひらけぬら

千公高門のつと 夕暮子息多うれし

ふふありて ときく人づつ

たのこむら べつふわつて なるなり

池のまのさりなりと 見ゆ

竹垣事 玄業並出 思良之日 冬之采池事 夏年

長根 結露

長根 年一

ふふが かりり

あつとを まるかよまるか 命のふつふわりの 後り人  
つとと 状を けりし 友のりて うれし 海に 空のなりハ  
ひらけり ときく 人のなり

か みの める人 十月 金谷 國純云 七月 七月 月 米

酒 樽 枕 夜 高 詠 札 延 甘 菓 酒 蒲 蕪 散 香

お 於 於 上 二 河 韋 織 女 言 二 星 祝 衣 會 粉

俗 人 狂 之 式 見 天 漢 中 見 乘 白 氣 歲 友 在 共

せんさいの ありて 有り

寄

とくあしやましくまをたつるゝぬくをまかりりる

風の香る人たむす 秋はつて夕暮を言しん

つきてるまきら月ひかり

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

月夜

まきら月ひかり

秋はつて夕暮を言しん

つきてるまきら月ひかり

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

まきら月ひかり

秋はつて夕暮を言しん

つきてるまきら月ひかり

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

ふのあまのうらやとまてよくそとぬゆるゆら

まきら月ひかり

秋はつて夕暮を言しん

麗色ハリケテ福ハ人ニ与ルニ何カズクハ世々守ル  
帝ヤリト世のこころよ

心可ト思ハルニ此の如ク其のこころ人ノ

古にハ神カキテ其の心ヲ守ルニ其のこころ

志ノ心ハ其ノ人トモトモト

志ノ心ハ其ノ人トモトモト

四佛者トシテハ

言ハルニ年始クハ

くちりノ心クハ 佛者中ニ本湯社

何レハ心ヲシテハ

心ニシテ内苑茶酒者著頼也

貫之ハ集佛名ノカケテ導師ノ心ノカケテ

つかりて名柄トシテカケテ法師トシテカケテ

志ノ心ハ其ノ人トモトモト

柄カケテ心ハ其ノ人トモトモト

心カケテ心ハ其ノ人トモトモト

心カケテ心ハ其ノ人トモトモト

心カケテ心ハ其ノ人トモトモト



四月二十三日

四月二十三日 知事 本年より多量にその  
此の頃の形の一つは、  
六月 既許 礼事と本年より多量にその

河津海でそれらと

才女六 雲隠

巻五 白岩の巻五のり されは、  
一

一かられと若しらる事

い巻は、  
い名部とて、  
集し、  
雲隠と、  
右言ハ、  
大伴皇太子、  
と、  
い、

い名部とて、  
集し、  
雲隠と、  
右言ハ、  
大伴皇太子、  
と、  
い、

集し、  
雲隠と、  
右言ハ、  
大伴皇太子、  
と、  
い、

雲隠と、  
右言ハ、  
大伴皇太子、  
と、  
い、

右言ハ、  
大伴皇太子、  
と、  
い、

大伴皇太子、  
と、  
い、

と、  
い、

い、

一者よりとづて巻とす事

天衣可立三義字教通義

因亦 四門

亦有亦空門也

有門空門世有北空門

三門の約道ハ世量空門約道ハ成実ハ世量

北空門迦旃紐ハ世亦有亦空門具勸誘ハあり

とて世福天竺とてありて漢土ハ胡来寺施と

大脚とて空門の如くありて世福とてあり

圖列の二教と判然と不見候と今世は

世と他名の胸中とてありてとてあり

とてありと世論と世論の崩脚とあり

して世の巻の巻とありて世源とあり

右の巻の巻の中とありて世の巻とあり

多略

第廿七

白雲の脚

一名董中

世の世ハ白雲ハ董中ハとありてあり

いりありあり

六巻後崩

深きのは門の四國

一文在序

あつたに藤の葉よりけり

あ代の三交 夏のやうき 白交意のす

あつたに藤の葉よりけり 同様と云ひ

夕霧を居る人の交のわづらふと云はれ

東交又び交と解はれと云ふん事にあたり

同様と云ひ

夏の栞にけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

あつたに藤の葉よりけり

とふ仏の四からこのとく

ららすのあまのうらふをにほりん

ますすらのにらりぬ

まぬの志はくあまのまをかひしる人かひく新のむら  
ゆつにあらぬ

久しゆ常は秋乃はあまをこころふま風あまふ  
まをあまをたにけま新あまはあまをけ  
あまをゆら  
あまをゆら

まをゆらまをゆらまをゆらまをゆら  
ゆらまをゆらまをゆらまをゆら

新新とまをゆらまをゆらまをゆら  
あまの老とまをゆらまをゆら  
ゆらまのゆらまのゆらまのゆら

還養人なりそあまをゆら **賭射法**わまをゆら

二年三月十日

ひらてあまのまを **恒下**  
りしりこまひて **ハシメ**女 **凡俗**

又此のころよりとしかうりてとしかうりて  
沖のまぐさのなかり  
かゝるく、かふえにいふ

善のよのよいあやう  
あやふまゝのまじりぬ梅の花よ

沖のまぐさ  
一方のまぐさうりあやうの目尻の糸のまじり  
あやふまゝのまじりぬ梅の花よ

紅梅 白老翁卿 并一

梅家使工納言杉江梅、年々考へて  
まじりあやうのまじりぬ梅の花よ  
あやふまゝのまじりぬ梅の花よ

何竹川巻と并の一二七定かう、兼中竹川  
いぬ、いぬ竹川中央、事終り中納言いぬ  
あやふまゝのまじりぬ梅の花よ  
又竹川の末、梅家工納言杉江梅、年々考へて  
何竹川の中央よりいぬ竹川の羽合と不指を

乞小橋水老の娘まの世より主人られ流おとさ  
同所なる女んたりし 兼中お流お納まりし  
竹川後推下 秋中御多任 不詮い老字流橋非北平編南同付し  
ままの流江のわきかきこの口し守りまれば  
るあまこくあ流ひま

野路右政右大臣 隆宣右大臣一巻

成龍後のわきかきと今とは代のわきかき右政  
大臣二人し流はる政大臣 者のうらふはして 隆宣  
右大臣 隆宣 隆宣の流とふと世のけお流中

右政大臣五人し入右大臣系右政大臣右系後流社  
大臣隆宣と隆宣ははは 右今集上忠仁云云 流  
のわきかきと今とは代のわきかき 右 隆宣の流はる  
延喜の流右政大臣二人し流のわきかき 右  
かき後の女流の流と今とは代のわきかき  
同後大臣隆宣と今とは代の流はる 右 隆宣の流はる

この事と

つまひきふ ツミギ 瓜澤 ツミギ

かきふとあつと カキ 流 カキ 奇 カキ 流 カキ 嘯 カキ

胡角一聲霜後夢、胡角吹笛第...

これひんぐれは伊予小朝ちりれ如物

春風吹く千笠竹 曉自同東窓一樹乳 文集

わづらひりるありけとてしんあふりり

釋論云尺也佛入涅槃以後阿難登高座結

集諸経時其形如佛仍衆會短佛再スレ...

如のくまよとてれそ

くまよのまよとてれそ移れえとくし句いりり

まよすつりらんよ かしむる月影とてあふり

まよひささいのまよ

ふさい我思すらん再よりい保りるまよと

まよと

ハのまのひりま 桐葉帝才八

竹川 并二

竹川贈若直若直に位竹匠送若竹匠奇世花  
人あはれ泉後女房贈若奇し

又正月廿九日甲申元日位約位 右約位 同書

新曲<sup>ウツ</sup>あしは年又格是<sup>ウツ</sup>白書<sup>ウツ</sup>卷二月書

中約位<sup>ナカウチ</sup>同<sup>ナカウチ</sup>年秋<sup>ナカウチ</sup>古<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>中<sup>ナカウチ</sup>約<sup>ナカウチ</sup>位<sup>ナカウチ</sup>階<sup>ナカウチ</sup>千<sup>ナカウチ</sup>時<sup>ナカウチ</sup>十九<sup>ナカウチ</sup>文<sup>ナカウチ</sup>は<sup>ナカウチ</sup>卷<sup>ナカウチ</sup>位<sup>ナカウチ</sup>

又<sup>ナカウチ</sup>姑<sup>ナカウチ</sup>中<sup>ナカウチ</sup>位<sup>ナカウチ</sup>約<sup>ナカウチ</sup>位<sup>ナカウチ</sup>終<sup>ナカウチ</sup>下<sup>ナカウチ</sup>任<sup>ナカウチ</sup>中<sup>ナカウチ</sup>納<sup>ナカウチ</sup>ら<sup>ナカウチ</sup>以<sup>ナカウチ</sup>是<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>一<sup>ナカウチ</sup>日<sup>ナカウチ</sup>合<sup>ナカウチ</sup>

い等のゆりあしはさるむと

約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

さるむと約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

いさるむと約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

人のひらあさるむと約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

い卷の約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

書さるむと約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

唯<sup>ナカウチ</sup>按<sup>ナカウチ</sup>り<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>あ<sup>ナカウチ</sup>の<sup>ナカウチ</sup>人<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>い<sup>ナカウチ</sup>は<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>一<sup>ナカウチ</sup>日<sup>ナカウチ</sup>合<sup>ナカウチ</sup>

約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

い<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>一<sup>ナカウチ</sup>日<sup>ナカウチ</sup>合<sup>ナカウチ</sup>は<sup>ナカウチ</sup>氏<sup>ナカウチ</sup>以<sup>ナカウチ</sup>是<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>一<sup>ナカウチ</sup>日<sup>ナカウチ</sup>合<sup>ナカウチ</sup>

出<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>と<sup>ナカウチ</sup>一<sup>ナカウチ</sup>日<sup>ナカウチ</sup>合<sup>ナカウチ</sup>

と<sup>ナカウチ</sup>は<sup>ナカウチ</sup>子<sup>ナカウチ</sup>つ<sup>ナカウチ</sup>り<sup>ナカウチ</sup>ツ<sup>ナカウチ</sup>け<sup>ナカウチ</sup>ら<sup>ナカウチ</sup>ら<sup>ナカウチ</sup> 卷

人のひらあさるむと約位古大位と書は氏のゆりあしはさるむと

人<sup>ナカウチ</sup>公<sup>ナカウチ</sup>ぬ<sup>ナカウチ</sup>書<sup>ナカウチ</sup>不<sup>ナカウチ</sup>常<sup>ナカウチ</sup>



ろくろふたをさるれとせまつらん

已ヨリ被レ揚ル犯ス遠ク側目文集

くそとていばさし木有りとも

唯ト多ク年ヲ合シ判ツ判シ 亦ト極ニ向テ立テあら

ふりまふ木のこころをまきりにいらぬまじりか

常ニ順フ

由レこい交シしりしとくらくこ

まゝしりしこころめされし

くそくらひるの 感シしるに

こきくさいさ は敢シ告ス

竹川とかがやきよこて 竹川告

竹川のこころはつらつらや私のこころはこころを分けて

かかげたやうな未練人のこころを分けて戻さすは

すいさい

念シすそいばあつたこと

竹川はよきあつたこと

竹川のこころはつらつら一アア

おまのこころは竹河街の端々まゝに 竹河

さく栲のあまはちりくいりり

栲さく栲のあまはちりくいりり

い栲のあまはちりくいりり

童雅トウヤ悉成人シツニヒト園林エンリン半ハル高木タカキ文集

ちりり人のあまはちりくいりり

栲さく栲のあまはちりくいりり

いさく栲のあまはちりくいりり

うさく栲のあまはちりくいりり

あさく栲のあまはちりくいりり

いさく栲のあまはちりくいりり

園基エンキのあまはちりくいりり

さく栲のあまはちりくいりり

あさく栲のあまはちりくいりり

始末シマツのあまはちりくいりり

皇納スミナ北キタ御ミ后ゴ妃ヒ 表書ヒラキに官人クニノヒト平ヘイは

伊イ息イ而ニ左サ右ウ平ヘイ女メの妃ヒ

所トコロのあまはちりくいりり

史記シキ曰イハレ季キ北キタ之ノ初ハジメ使シ北キタ遇ユ徐コ君キミに

将マシ季キ北キタ母ハハ

げ下暗く

かくてのそそつる

世中とくつひくの

みりあそつる ちあすらのなろそつる

ちあすつせつひそつちあすつちあすつちあすつ  
右あすつつさくの人つりつりつ

あすつちあすつ

あすつちあすつ 天承二年二月右あすつちあすつ  
あすつちあすつ ちあすつちあすつ

あすつちあすつ 右あすつちあすつ

あすつちあすつ 右あすつちあすつ

あすつちあすつ 右あすつちあすつ

あすつちあすつ 右あすつちあすつ

あすつちあすつ

あすつちあすつ 右あすつちあすつ

あすつちあすつ

あすつちあすつ

あすつちあすつ

り即乳母の名をぬりて何の事かきくしとて  
まふりしや

本年かおは只の里下とておとししこのうら  
しむりしに

弟廿八 橋非

<sup>卷名</sup>しひらのむとてはせしとて身おし

一名後學宮とて又しとてしとてしとてあり

つとつと

その時ふしとてなれはぬやまおつたり

宇治文初意帝中八を八ま後學宮とて

左大臣女とてしとてしとてしとてあり

初月由りしとてしとてしとてあり

行まそとてしとてしとてあり

こころつとつと <sup>玉篇</sup> 梁大同九年三月廿八日燕門

侍臣良益太子博士顧野王撰字廿万九千七

十字 三十卷五百部

すまゝのいづみひさりとして

硯いんの文殊は沙眼也は右眼石といはれずと仰て  
又石いしとい書かと云ふ仍い面おもは地ちとくさるし昔むかしは

御ご日記にっぴと硯いん面おもと書かとあり

見みる石いしの形かたちは地ちの形かたちよりさう此こゝでいづれはさ  
かしくまゝの打ち手うぢてより書かの硯いんを下くだりより書かより  
右みぎ中ちゆう勢せい文ぶんの山やま方をせ流ながして板いたあひだれまゝなりと  
いさうして三葉さんえつたまたは石いしは石いし多おほくはりひつ  
りすすくしてつ井いよりいさうにすくはれり

り多おほくの所の小方のとさうとぬきとくそ  
え流ながひは石いしの形かたちよりさうと云ふいさうとあはえ  
らかしくあひだりよりさうといふまゝに右みぎ中ちゆう勢せい  
此こゝ書かの板いたは中ちゆう流ながひは石いしの形かたちよりさうと云ふ  
まゝ流ながるるをそのついでに書かの形かたちよりさうといふ  
まゝに人ひとの作り流ながるるの所ところに右みぎ中ちゆう勢せいのついで  
に石いしの形かたちよりさうといふまゝに今いまよりさうといふ  
まゝ

まゝのいづみ

すまゝのいづみはさういふまゝに右みぎ中ちゆう勢せいのついで

あまののくにむすぶあけいふをあるのよるにすよりあは  
かひつらひのいののいのついでいよ

わづらひのぬらふも後のまじり

いふまにむすむすいふて かざれ 江邊 かざらん

月よりほろりせふもせむ川のつらむらてをうすま

すかより人 漢人

臣家の偏におもやほろり可くすまるとは見ゆ所死

そのの物さうりかひありて

たのむ衆の物さうりかひのこもあせの世のゆたに

かゝりい草のうへは果のゆふよりめれ池より

池中、蓮花大如車輪 河原後院

まじいよりとる 浮者舟すまふ、おまふ、あま

俗教の戒行とわづらひのいふ中子の中後院

寒きま

川のまゝさうりしてさめゆきとちりやう

あまのふられ川のこもりたて揚舟人のうらそた

はほのつら十は四ふせなり、くまの 谷原の

わづらひのつらむすむすも 河原後院の

しんがく 公言を後とふらんをいひてけし  
うら川の物のこふ者こそ秋のいふは移り  
貝入のふり竹ありと 云々 御方と

ことしはつゆりりあふし  
定物禁戒のせし戒行と恵ぬる者初し  
うさくふゆめのとえ路るもの 天道を教唯與者人  
佛教こそ告世人を始人ありふ事子と告世  
悪行と云り

竹ありすいはい 五祭三圓新茶茶在階石

竹編 文集

そく事よりつる月のみくふくわくさうか  
らそく事よりつる月のみくふくわくさうか  
止観

わく事よりつる月のみくふくわくさうか  
移の移の月と云ふそく事よりつる月のみく  
は移の移の月と云ふそく事よりつる月のみく  
月事 移の移の月と云ふそく事よりつる月のみく  
わく事よりつる月のみくふくわくさうか





わらわのふさぐけのまといとてうめく

宇治川のほとりには神とてありありとある

神 ヒコ 和名 ヒコ 沙栗

玉の基 橋基 ヒコ 記

ちいさのつとて 橋水 ヒコ 宇治の橋水

さしりやま ヒコ 衣 ヒコ 衣

橋水と云古ゆれと 橋 ヒコ 者は法皇大化二年

沙門道昭 ヒコ 妹 ヒコ 妹

わらわのふさぐけ

まきまきの糸とあやめはよきとて

つとあひと ヒコ 衣 ヒコ 衣

蜂 ヒコ 蜂 ヒコ 蜂 ヒコ 蜂 ヒコ 蜂

よ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣

ゆれ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣

ゆ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣

ゆ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣

ゆ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣

ゆ ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣 ヒコ 衣



ちる橋のまじりまひけりし

橋さくらさくら此ら橋え

川を柳のまじり

おとしの川に柳より釣はきやと名をきよしの秋にそ

吹寸はらちちかひて 酢 解 天 在 王 又 海 あ 未 と き 取 て

山王いりりり屏風 昔 通 の あ ら せ り り

屏風にしりし山王の石うらさし 洞 名 よ い 字 下

海骨し竹而と流て 洞 名 は 洞 名 よ い 字 下

屏風しきし又いりり屏風とまじりし 車 の

いりり竹とり山白蝶てくしりり物し や 所 ん

おほきんきんく 早 う ろ ろ 人 あ ま い が い き は 位 の

つうれたらり 生 後 生

かいまゆ位 かい ま ま の ま こ 主 氏 の ま 位 と ま 位

山橋よりわらり お き さ か り さ さ と お り え ら ら

我家し い の じ い れ

灯よ さ ら と

ふりし何向らん 新 の よ 何 ま さ り り か と あ か

事おし 持 ち の 新 中 油 と よ り ね れ

い事お中の竹川去<sub>リ</sub>中納言<sub>ト</sub>人々<sub>ト</sub>り又<sub>ハ</sub>此  
中納言<sub>ト</sub>之<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>日<sub>ト</sub>也

くらり<sub>ト</sub>ミテ 離<sub>リ</sub>陸<sub>メ</sub>日 若<sub>シ</sub>門<sub>ノ</sub>多<sub>ク</sub>也<sub>ト</sub>

都<sub>ノ</sub>ろ<sub>ク</sub>の<sub>レ</sub>お<sub>シ</sub>足<sub>リ</sub>た<sub>リ</sub>ま<sub>デ</sub>の<sub>レ</sub>進<sub>ミ</sub>さ<sub>テ</sub>くら<sub>リ</sub>ひ<sub>キ</sub>り

う<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>立<sub>テ</sub>年<sub>ノ</sub>ゆ<sub>キ</sub>り

香山<sub>ノ</sub>大<sub>ノ</sub>樹<sub>ノ</sub>堅<sub>ク</sub>加<sub>フ</sub>得<sub>ル</sub>佛<sub>ノ</sub>が<sub>レ</sub>海<sub>ノ</sub>邊<sub>ノ</sub>築<sub>ル</sub>奉<sub>ス</sub>八<sub>ノ</sub>方

四千<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>舞<sub>ヒ</sub>也<sub>ト</sub>葉<sub>ノ</sub>る<sub>者</sub>忘<sub>レ</sub>威<sub>儀</sub>を<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>年<sub>ノ</sub>か<sub>リ</sub>

丁<sub>酉</sub>ハ<sub>ニ</sub>カ<sub>キ</sub>ケ<sub>テ</sub>

神<sub>皇</sub>三<sub>年</sub>令<sub>法</sub>國<sub>ヲ</sub>作<sub>進</sub>相<sub>撲</sub>人<sub>ヲ</sub>

七月十七日<sub>ノ</sub>日<sub>ヲ</sub>お<sub>撰</sub>出<sub>佛</sub>也<sub>ト</sub>女<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>内<sub>宅</sub>小<sub>月</sub>女<sub>ノ</sub>也<sub>ト</sub>

八<sub>月</sub>在<sub>今</sub>小<sub>月</sub>女<sub>ノ</sub>七<sub>日</sub>廿<sub>九</sub>日<sub>振</sub>也<sub>ト</sub>小<sub>月</sub>女<sub>ノ</sub>八<sub>日</sub>也<sub>ト</sub>法

國<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>供<sub>出</sub>人<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>集<sub>メ</sub>て<sub>レ</sub>沙<sub>流</sub>人<sub>ノ</sub>す<sub>ル</sub>之<sub>レ</sub>在<sub>今</sub>後<sub>一</sub>

す<sub>ら</sub>り<sub>て</sub>沙<sub>流</sub>人<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>接<sub>ホ</sub>と<sub>ス</sub>也

祐<sub>ク</sub>り<sub>キ</sub>り<sub>納</sub>も<sub>ハ</sub>交<sub>ハ</sub>つ<sub>ル</sub>う<sub>レ</sub>ゆ<sub>ハ</sub>い<sub>テ</sub>る<sub>ク</sub>

悲<sub>カ</sub>祐<sub>ク</sub>為<sub>ス</sub>氣<sub>蕭</sub>瑟<sub>ト</sub> 文<sub>選</sub>

中<sub>ニ</sub>の<sub>レ</sub>三<sub>つ</sub>の<sub>レ</sub>事<sub>ヲ</sub>あ<sub>ラ</sub>せ<sub>テ</sub>会<sub>佛</sub>と<sub>ス</sub>ま<sub>デ</sub>は<sub>ク</sub>と<sub>人</sub>と

傳<sub>ハ</sub>お<sub>大</sub>師<sub>云</sub>と<sub>ス</sub>於<sub>レ</sub>惡<sub>見</sub>法<sub>録</sub>事<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>於<sub>レ</sub>取<sub>捨</sub>善

提<sub>心</sub>應<sub>と</sub>為<sub>ス</sub>連<sub>白</sub>蒙<sub>若</sub>安<sub>於</sub>彼<sub>處</sub>也<sub>ト</sub>也<sub>ト</sub>

可成母やふくらんやまもねんうやうま

余命八千不願出冥トウマクシク長秋ヤツク恒生死トク 十位原

歎、絶、知門ツク狹、泣、也、秋、甚、日

いしりくうすううい 早もりひりりかきま

かまごのひつじん三昧多ふをそねと

我か仏法中、知一行三昧、而後念仏三昧也

秘者

いしりくうすううい 海、うららひのり

史記曰孝惠帝崩太后哭泣海下歎の切

うらな海らうううう

かけぬ香のつりううう九月

かけぬ香のつりうううううううううう

うらぬううううううう

黒髪服衣の料也 黒髪、新の香つ、初の

便、此、初、ううう

あまううううううう

うううううううううううううううう

うううううう 有教うううう

うううううううう けまうううううう

海にまをたぬいし  
かたしつら 溺死

しつとけさくあわねるまをたぬいし  
しつとけさくあわねるまをたぬいし

あはれまをたぬいし  
あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし  
あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

祐吾れねぬそせよ

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

あはれまをたぬいし

こつちの祈りありしとて

殊のありしとてありしとて

雲しとてありしとて

凍トウラン雪ユキ合アヒりて雪の祈り多し

まじしとてありしとて

祇のまじしとてありしとて

いとのまじしとてありしとて

神のまじしとてありしとて

まじしとてありしとて

はるのまじしとてありしとて

山脈とて通用し 紙のまじしとて

第三十

総角

カキのまじしとてありしとて

雪のまじしとてありしとて

かきとてありしとて

たりしとてありしとて

し女子のうらみのほらうらむけし時あはな海も  
我のいよむよめつり

つひよるまじうのこゑもつらよなぬらふ  
くまをばなれいあさきくあをそとあ  
まらそしつるあつたをまらぬあまのこ  
くつらそあめいこあらはは女にたつあまの  
せらりぬらうらう人あつたそあまの  
つらうらうらう人いまよりそはまら  
たあまのこゑもあまのこゑもいよら  
あまのこゑもあまのこゑもいよら  
あまのこゑもあまのこゑもいよら

しうらむそつらむ都をいあで城候といむぬら  
伊場のいよむらういよむらう

世系大納言新撰龍徳一巻の四の中巻より  
一巻の家四の女房よりつらむら  
あまのこゑも

しうらむそつらむ都をいあで城候といむぬら  
伊場のいよむらういよむらう  
あまのこゑも  
徳川家  
徳川家



わすれ何ぞとてうけよ

こゝろとてあゝとてうけよ

つくし木よとてうけよ

かゝらとてうけよ

あつとてうけよ

ふとけつとてうけよ

こゝろとてうけよ

わすれとてうけよ

芙蓉<sup>あざむぎ</sup>が家<sup>いへ</sup>の葉<sup>は</sup>の影<sup>かげ</sup>の門<sup>かど</sup>限<sup>かぎ</sup>り

神<sup>かみ</sup>のまゝとてうけよ

奥<sup>おく</sup>のそれの神<sup>かみ</sup>のまゝとてうけよ

地<sup>ち</sup>のまゝとてうけよ

辺<sup>へ</sup>のまゝとてうけよ

わすれとてうけよ

とてうけよ

晨<sup>あした</sup>の鳥<sup>とり</sup>の影<sup>かげ</sup>のまゝとてうけよ

我<sup>われ</sup>をうけよ

ふとてうけよ

かけあそびなる事とありありと見せしめりけるの

安灯可也止すべし此は取加利也止すべし此は取利

天祿用礼止毛万呂法安比汁利止すべし此は取略

五月十日のついで 男女初倉合西五九月忌之

くうの物と 様々ありていふに上りの物なりて重

きうしてあはし

すくせとてふりかたよつとてあそびの事とあはし

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

世中とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

そとに取とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

かきりていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

能事多物と人の中さうとていふ事とていふ事と

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

とあはしりていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

かきりていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事と

玉の足跡の木に糸を張津をほくふくぬあまのり  
かへんうめわぬ新のよの世に

みくもと見そをそを

かへの侍れきりくすいふいおらる

蟋蟀せせり飛壁とびかべ 月つき 遠とほ 暗壁くらかべ 限かぎ 旦あした 寒かぜ

燕つばき未な能ら歸る 白しろ玉たま天あま

月つきもつげのゆら

あつちのあまのりすいふはあまのりしむのり  
かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

かへんうめわぬ新のよの世に

石室のふらふらと人々のまじり合ふ  
神の御事ありのふらふらと人々のまじり合ふ  
つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ

後とてさうさうと人々のまじり合ふ  
をふらふらと人々のまじり合ふ

さ井とてさうさうと人々のまじり合ふ  
まのあつきの海のつらつらと人々のまじり合ふ

つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ  
月夜のまのあつきの海

つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ

つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ  
つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ  
つらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ

人のつらつらと我のつらつらと人々のまじり合ふ

九氣懐深秋梢合友魂者及主人魂主人

魂之可神意懐外至契者知

夫人をそは深哉帝甘泉殿の程上顔と

高して方士として吳茶と命せし合灯契

一六六番の松の仲に主人の妾とてし  
わすれられたる女は、わすれられたる女  
たゞだりて、さういふ女とて

若くは、井の邊に流れては、命とて  
く被いつる可い女とて、さういふ

女は、さういふ女とて、さういふ  
女は、さういふ女とて、さういふ

女は、さういふ女とて、さういふ  
女は、さういふ女とて、さういふ

常不敗とて、人つとて、さういふ

祇園教海寺不教恒場、可者何汝等皆行善

薩道當得作佛 はるばる

釋尊自位、不將并とて、け女は子の傷と

とて、て、さういふ女とて、さういふ

姓は、さういふ女とて、さういふ

とよのわらわ、貴の命、さういふ女と

とよのわらわ、さういふ女とて、さういふ

わらわ、さういふ女とて、さういふ

わもりとさあるへく 伊勢の流とわり  
ひのくれとさるへく うせいのとさるへく  
せうまのつらとさるへく けぬるへく

薫たおのせとさるへく ちのちのちのちのち  
りしちのちのちのちのちのちのちのちのち  
うとくちのちのちのちのちのちのちのち

ひのちのちのちのちのちのちのちのちのち

遺愛寺詩歌抄社

うのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのちのちのちのちのち

第廿一 早蕨

<sup>まじな</sup>いそがしきあふるる人たれあふるまじりつる早蕨のまじり  
あふるまじりあふるまじりあふるまじり

あひりあふるまじり

いそがしきあふるる人たれ人のまじり

あふるまじりあふるまじり

いそがしきあふるる人たれ人のまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

いそがしきあふるる人たれ人のまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじり

いそがしきあふるる人たれ人のまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

あふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじりあふるまじり

いそがしきあふるる人たれ人のまじり

のうらむじきと申かして昔の徳と依るといふ  
いふくもきりわつとてきこひぬきすては

限わきいふぬきすては

みきりわきいふぬきすては 除服のよこ

河原におて<sup>た</sup>除<sup>け</sup>下<sup>り</sup>しわきいふぬきすては三月  
きりわつとてきこひぬきすては三月の  
服のてきいふぬきすては三月の  
とてきこひぬきすては

申まいしきりわつとてきこひぬきすては

とがわきいふぬきすては 海川よあすの口りの約き後

はぬきすては

私のうらむじきと申かして昔の徳と依るといふ

且月の花よりぬきすては

神よりぬきすては 神よりぬきすては  
のうらむじきと申かして昔の徳と依るといふ  
いふくもきりわつとてきこひぬきすては

あさこのうらむじきと申かして昔の徳と依るといふ  
あさこのうらむじきと申かして昔の徳と依るといふ





のうととて名をいひてうまれり 白氏文集  
湖<sup>ミウマシノヒカシ</sup>と云りいよとて万葉に云ふやと云ふ  
とよふりてうらひのうらひとて云ふ  
とくやうらひの恒海に又拾和奇有<sup>チカウ</sup>三曲  
あはる是事し才二とてうら恒海とて才三  
ふらる湖海事し  
白<sup>ヒ</sup>くく<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>わ<sup>ワ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>て  
若<sup>ニ</sup>く<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>わ<sup>ワ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>て

茅世三 宿木 寄生

まのり本と云ふすゝのりの核<sup>クワ</sup>持<sup>ヂ</sup>つゝふ<sup>フ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>  
まのり本と云ふすゝのりの核<sup>クワ</sup>持<sup>ヂ</sup>つゝふ<sup>フ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>  
核<sup>クワ</sup>持<sup>ヂ</sup>つゝふ<sup>フ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>  
つゝふ<sup>フ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>  
あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>  
あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>  
あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>

從よとこよの交よつこをそらとてあまをさうとてり  
わらうまさきとてとく 歎逝賦曰日るいあまをさうとてり  
わらうてそらとてのこをさうとてり

小西の女屋の居住する方と

あまのこもつるとしてあまのひて

前住の女屋の居住する方とてあまのこもつるとしてあまのひて

今あまのこの中まの初め女のこころりしては女のこ

とてあまのこよあまの初め女のこころりしては女のこ

与君後新婚荒餘附女羅古詩女羅は初め

初羅之契(初羅は初め) 伴行尺八奥入初羅は初め

とてあまのこよあまの初め女のこころりしては女のこ

毛詩云小童裁萱草(小童は初め) 故忘憂(初め)

いはよ萱草とてあまの初め女のこころりしては女のこ

あまの初め今も初め女のこころりしては女のこ

世のうれりいあまの初め女のこころりしては女のこ

あまの初めあまの初め女のこころりしては女のこ

あまの初めあまの初め女のこころりしては女のこ

あまの初めあまの初め女のこころりしては女のこ

月分りいひゆめと 月樞中十月とらう  
んあをれいふことと人わりたれ  
辨りのこひいふこと

ありまのまこと ありまの舎約まの  
かといふこと いかんこといふこと  
ひらきおとすのひにまこと ひらきおとす  
あまのつらうこといふこと

うらまのこひいふこと  
まこといふこと  
まこといふこと  
まこといふこと

雲川舎約の開川 寛平菊舎約

あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと

あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと

あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと

あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと  
あまのつらうこといふこと

ふれりしはせぬやみりきりきりきりきりきりきりきりきり  
業とてあやすまぬ

あまのそとすまぬ思ふにわらはうとらうとらうとらう  
はきとふとあのおのあらしと

うとあのおのあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと  
はらふふあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと  
あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと  
あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと

あらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしとあらしと



その事の中此等なるうらやまけりて  
我ふ中亦ありていふよりいふ事と  
いふよりいふ事とを  
私のいふいふ事とていふ事と  
いふ事と

不是死中偏愛着は死周の文  
西文たるは是れ是物降糸樹上  
呪詛い初教作者之不言也  
極秘中曲小呪醒  
唐貞観之書

つとゆつとつと

賺尺波京官除自は執事直物と申す也  
或除目は三月経てり  
の事とていふ事と

いと書入る事と  
いと書入る事と  
いと書入る事と

いと書入る事と  
いと書入る事と  
いと書入る事と  
いと書入る事と

延喜二年三月廿日沙記云日在臣花多命丸  
花下有獻物ト

三つものふりさ ニヨクマウヤ 銀楊墨 或茶墨 歌行記

四つものさけてよとの花のこいつい  
進食 ニヨクマウヤ 日記

ふそいふたのふりさ ニヨクマウヤ 宴

五つものさけてよとの花のこいつい

花多命花宴 ニヨクマウヤ 延喜御記

のそいふたのふりさ ニヨクマウヤ 日記

花多命花宴 ニヨクマウヤ 延喜御記

いふれ花車トク イトケ 庭沙車 糸毛 金道

摘柳毛綱代

取令細細合名花ト半柳使名曰乃武村

太上天 禊祓花物初四好也 ニヨクマウヤ

ふそいふたのふりさ ニヨクマウヤ 日記

花多命花宴 ニヨクマウヤ 延喜御記

のそいふたのふりさ ニヨクマウヤ 日記

花多命花宴 ニヨクマウヤ 延喜御記



毛詩云流離リウレイ女ニョメ与白チロク好コトナ老コトナ甚シク醜シウ

いあり鳥トリを此コノ一ヒト名ナ魚イサをヲとル也トシテ此コノ詩シはコノ詩シにシテ言コトふル

よ死シをコトにシテ死シるルをコトにシテ言コトふル

又マタ公コウ孫ソン少シウ少シウ言コトふル也トシテ言コトふル

下カ地チをコトにシテ言コトふル也トシテ言コトふル

をコトにシテ言コトふル

ふもの中ナカをコトにシテ言コトふル

第廿三 東屋 阿アニヤニヤ下カトモリ

こゝしんじりてんたのあまり  
ほろるとまけたまり

筑波ツクハふとまけたまり

ふとまけたまり

守モリ子コはハまハまハ

守モリのノ親チカ王クニ孫ノ孫ノ孫ノ孫ノ

國クニ務トをコトにシテ言コトふル

山ヤマ子コ守モリはハまハ

孝コウ信シン上ジョウ野ノ由ユ國クニ不フ親チカ王クニ

とくいしうりう (五)

あいなうらうらのにうりうり 内家防由家防石内家

合名

るりうらうこれゆりてうて

万秋宗内家防石をうりて 宛いさうりう

り曲のゆとんあ六折の事し 老防防

十三家ゆりて本名 防防才一社

内家防より世の師と迎うり 初儀のたす

甚心

あいのめい 守まへ何のめい

は初しを境まてあうりこれあいの宛人え

うりうりて多と

もいあいのひくみさ

あうらうらうらうとあひまた

あうらうらうらうらうの平う

あいのゆりてあうらうらうのゆり

あいのゆりてあうらうらうのゆり

あうらうらうらうらう

あうらうらうらうらう

うにまのあられのうら

ゆるる人の心と云ふはあられのうらまへと云ふは

神もひらくものこひあはれんて

大にこれ神の一のうらまへと云ふは

世中は若しりやいりえん

千人のうらまへをたてて

人形 糸礼具 一柱 一壺

あまの川をたて

あまの川と云ふは

しりのねつりしり

こころと云ふは

ねつりしりしり

かゝるしりしり

若有人問是藥王菩薩

告者是人現世

孔中常本牛頭梅檀之香

較るぬかしの

かゝるぬかしの

つれづれと打ちしきぬと

もろくとほり事とぬとつれづれとたよる

そととそ みるもと玉後し

うーとと 鞍置鳥

ゆすりのあがりくつりつりく

洗髪は首向友 醫書体

いとそととつりて

つれづれとつりてつりてつりて

つれづれとつりてつりて

つれづれとつりてつりてつりて

つれづれのつりてつりて

つれづれのつりてつりて

つれづれのつりてつりて

つれづれのつりて

つれづれのつりてつりて

つれづれのつりてつりて

つれづれ

つれづれのつりてつりて

可なりかたしつるまゝこゝに中まの母儀と若儀  
外妻とそつゝさま

うしほおひまゝのうらたしはつらと

うらたしとまゝかたしはつらとまゝかたし

まゝかたしとまゝかたしとまゝかたしとまゝかたし

まゝかたしとまゝかたしとまゝかたし

まゝかたしとまゝかたしとまゝかたし

わぬふ

世中よわらふまゝかたしとまゝかたしとまゝかたし

わぬふありはなけふまゝかたしとまゝかたし

愛宕聖者定也上人事んけい山縁部曰

空也上人於清水寺交提形今仏行何可

してく意考のむせよつら近お後のまゝかたし

と初念せられまゝかたし軟音告訴く 愛宕山

月輪寺は是補陀洛山同海也魔害動

跡聖者新向之むかたし何けりて可指くは

まゝかたし初向之むかたし何けりて可指くは

中念佛の行と弘通し初人と度せまゝかたし

人曰予こそはゆめ家

衆生無邊誓願度 正弘誓願は正一

はらうゆめめこそ小庵のちりくそ

いづこより 伊賀名初女 中媒し又言伊賀刀母

釋云 伊賀刀母は狐に 新云くそそくそくそくそ

女の事

こゝとじりしくく底さあへのあまりけくあまら

四阿合 阿屋 阿屋 東 阿部

阿屋合 宮殿宮阿 阿部多立成云阿阿部

東夜同合 庶人門合 庶人門 雨下 庶人

をふあたるこころうこさ

あふくよめいあまのひくくくくくくくくくくく

かふりしきものすりあ

見花達 知車作 道系車

胸の中うさうさくくくくくくくくくくくくくく

しりしりしりの道と車れり云とすりあ

ちりのすりあ 私と云の庶人の孫の丸

うものりそわると車のおふひきへと

車中より川やうてお後回車するところ  
おしつけのなれやま 厚のやうに衣をひき  
自高至低 こころ  
ひやうさうやうにみらぬへうり

秋を告じゆくさうよ  
あふれうつまといふ事い 秋のす ちまのよ  
のあまりのあきさまれうらぬきぬあたるを  
千ののこころいそわらぬあたるを  
ひのそさまをえらぬらん事 いふまゝ

そらうたいのうの春のうらの歌  
花王基と秋琴 うた  
いしをわきわううたりてつら  
ふ里のゆのさうさ事いそわ

茅草に 浮舟  
はらふあのみつなをうらうとけいれあの新来をま  
あまのを

あまよのそりふきれてこゝの字とがくし

うつりまはせなまふ 卯樵 ツツ 卯樵 卯樵天皇三年

二月天皇 朔万国前殿し卯年案献之杖

八十枚

まぐりしふら花はかりてつゝぬきまふ杖

ニタ 榎

未大布判

めりら

肉妻

賭

三月

十つこ年也

コノ 文情

肉妻

祝の初と作

こけり作りのたふしん

きんそりの人ともまそり酒

神の中こもまそり酒

ケ 顕證

まのうまぬくこひつうつらして

まのうまぬくこひつうつらして

よのうまぬくこひつうつらして

いづらのひの夕月

陰陽家、朧月とせぬりの月を用とる

まじりてしるすはよとらるるまの

茶花名 面之帯 神を汗踏と立



能目多松も鳥とささきいふとわり  
わりしよまきかきより おていふれが列の  
衣さういふ山いりや さじらふ衣さういふ  
はららあのをさすまといて ふうしうとさすれをさす  
戸素い橋つ又小つこのらまにさうりはふ  
皇子あのをさすい多松と河内國とわりあ他七  
漸松<sup>せんそう</sup>あとい大つ橋の小つら海國とにせり  
まふかりすか 大上の座のらあつさ女川  
祇すじとと ころあのをさす川(の)  
うたさあれさうらりの流わうて  
恨さすれさうらるをれ後さあけさうて  
あのをさういふつせれやいん  
はらあのをさすのさういふ  
わうらり夕暮のあをさすさあれ松  
まありかふかとさういふと  
新あのをさすさうまきりあれさうあをさす  
つまといふさうあをさすさういふ  
すくといふさういふ

御えいりのごよりのこと

りきのやまのりごよりのことと皇のききききき

みづの川に流れてまがけり

ききき

けききのうごうのりご

久知の久知をけりるるるるるるるるるるるる

余百字志未也未略し 道律

つふかりごごごごごごごごごごごごごごごご

海風のききききききききききききききききき

この内記は上へんりるるるるるるるるるるるる

上代<sup>たのたの</sup>政<sup>たのたの</sup>記<sup>たのたの</sup> 上代<sup>たのたの</sup>の<sup>たのたの</sup>文字<sup>たのたの</sup>書<sup>たのたの</sup>事<sup>たのたの</sup>

いふごごごごごごごごごごごごごごごごご

くうれ事あるたりごごごごごごごごごごごご

貞女不<sup>たのたの</sup>変<sup>たのたの</sup>二<sup>たのたの</sup>丈<sup>たのたの</sup> 史記

みかまのりごごごごごごごごごごごごごごごご

ごごごごごごごごごごごごごごごごご

ききききききききききききききききききききき

お前の書ごごごごごごごごごごごごごごごご



古ゆきのしむつこゝろめかしくゆゆし  
と新の多きふらりしけり

新の多きふらりしけり  
今つらくかしんははしくもせし

宋玉為屈原作招魂詞曰帝名巫陽曰  
有以在下我欲輔之魂能離散汝巫与之

王逸楚詞章句曰帝謂天帝也巫陽神醫  
也餘生欲先海南村帝遣巫陽招我

云鬼  
云東坡

つれはけしつれはつれはつれは

つれはつれはつれはつれはつれはつれは  
つれはつれはつれはつれはつれはつれは

つれはつれはつれはつれはつれはつれは  
つれはつれはつれはつれはつれはつれは

日中記云溟渤とありしはよりりしといふ  
ころりしは同也

つれはつれはつれはつれはつれはつれは  
つれはつれはつれはつれはつれはつれは

存長皇帝 上曰吾因黃帝不死有

何也 或曰 黃帝已僊 上天 群臣葬其衣  
冠 史記

えいしん 多のつれはらめい

て 憐病病 秋半 野人 薄媚 和鶴 三更 過曉

ちれろーらとわかれり

杜仙翁

こまこま かくまそ びらり 立ちまれろーら

り 夕なれつとやわかれ也 夕なり 夕なれ

くまこまつと

花人の常かろう びらり けし 移しのこまこま 若人

くまこま けし びらり けし 移しのこまこま

くまこま けし びらり けし 移しのこまこま

せれわ ねす 夕ろろろ 夕を 袖

夕れ 夕ろろろ 夕ろろろ 世中 ねれ 夕

夕け 夕ろろろ 夕

夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ

私言 延と 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ

夕延 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ

夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ 夕ろろろ

は家と下。三反福乞ふ所の一日。一衣襟納か  
ゆきよりしゆりれありり。孝をいひ福を  
納す。福乞ふ所より。孝修し私願す  
不あまらるり

ついでとてつらき事。世にさうりしことと

如し。福乞ふ人。志。須。備。救。岸。上。人。何。月。  
河津の 親任主事おせい

うに布してゆい

世にさうりしことと

ついでとてつらき事

うに布してゆい

世にさうりしことと

ついでとてつらき事

うに布してゆい

ついでとてつらき事

うに布してゆい

世にさうりしことと

てすま

白後

いまもるふのゆきつらりのつらりたる

辰右衛門の粉色ゆき とねすけ

せうらのちのめとねまの女一のまぢひしつちの  
夕なれ ちゆはとある屋敷をまにまに

まにまにばねのちゆはとある屋敷をまにまに  
ちゆはとある屋敷をまにまに  
ちゆはとある屋敷をまにまに  
ちゆはとある屋敷をまにまに  
ちゆはとある屋敷をまにまに

とまらつてふらりおんまにまにまにまにまに

女高麗かづのちゆはと

いさかふふふのちゆはと おれおれおれ

つふつのでらるるまにまに

初中 おれおれおれ 是れ秋の天 白ふ天

つふつのでらるるまにまに

故令 おれおれおれ 将織手 おれおれおれ 行 おれおれおれ 弄水 おれおれおれ 絃 おれおれおれ 再 おれおれおれ 同 おれおれおれ 行 おれおれおれ 気 おれおれおれ 後 おれおれおれ 胆 おれおれおれ 足 おれおれおれ

若 おれおれおれ の おれおれおれ 情 おれおれおれ

はるまのちゆはと





芥子六

の習

浮舟乗カトテ行ハ渡の川のるまおしとわくはり  
てふしといふ詞老の仲よはけあまを望むの意  
ワタキとわかあまもせいのめくさあまもひと  
アいののまといあまもつるりの号の習ま  
アひこの信教とる君公信教トし通世は信  
兵、控川、若の号、控川、信教と  
信教、回、件、信教、名、お、國、高、地、下、郡、人、夫、と、右  
部、正、親、母、馬、反、肉、く、母、妾、天、人、下、様、一、男、妾

見畢、是は江人共可成、聖人と思てをば、  
母念新、精、子息、お、親、音、長、音、守、之、知、妾、中、  
信、本、念、与、一、珠、見、畢、不、久、懐、妊、生、男、子、  
即、惠、心、信、教、を、お、女、人、に、は、じ、事、縁、益、心、  
お、家、御、戒、修、子、ト、業、既、お、福、系、交、擇、  
ア、ひ、り、や、さ、か、や、ま、の、の、い、を、お、し、る、り、  
と、ん、ふ、い、ら、り、ま、ら、お、と、ふ、お、わ、り、り、  
ふ、川、と、セ、一、そ、こ、ま、ら、ら、う、り、の、い、お、く、し、  
と、思、れ、と、さ、り、の、あ、り、お、の、お、り、の、元、は、

惠の備知妹<sup>妹</sup>終曾之時<sup>終</sup>必<sup>必</sup>一<sup>一</sup>來<sup>來</sup>會<sup>會</sup>之  
備知<sup>備知</sup>果<sup>果</sup>納<sup>納</sup>之<sup>之</sup> け下略<sup>け下略</sup>

三つ孫の一人を人ら忌下りしけりしけり

水<sup>水</sup>邊<sup>邊</sup>に<sup>に</sup> 欽<sup>欽</sup>四<sup>四</sup>天<sup>天</sup>皇<sup>皇</sup>御<sup>御</sup>宇<sup>宇</sup>其<sup>其</sup>後<sup>後</sup>國<sup>國</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>に

しれた女もむしとそよのすきりしは<sup>は</sup>聖<sup>聖</sup>中<sup>中</sup>小<sup>小</sup>女<sup>女</sup>

わひのしきとれと女として男子一人をうりて月

りといふふあ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>大<sup>大</sup>十<sup>十</sup>二<sup>二</sup>月<sup>月</sup>十<sup>十</sup>六<sup>六</sup>日<sup>日</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

さい女ら孫をうら女をよよとて人をとく

すのあふ入しきその附は犬をうりて毒の

女をうらんとす女をうりて野にりては

まのうらとそりり

ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

文<sup>文</sup>珠<sup>珠</sup>樓<sup>樓</sup>月<sup>月</sup>を<sup>を</sup>以<sup>以</sup>事<sup>事</sup>に<sup>に</sup> 田<sup>田</sup>記<sup>記</sup>と<sup>と</sup>目<sup>目</sup>冠<sup>冠</sup>と<sup>と</sup>号<sup>号</sup>す

人の公事とて人をとくそきりかりのあやとて

假<sup>假</sup>名<sup>名</sup>遣<sup>遣</sup>人<sup>人</sup>於<sup>於</sup>是<sup>是</sup>真<sup>真</sup>名<sup>名</sup>遣<sup>遣</sup>人<sup>人</sup>應<sup>應</sup>は<sup>は</sup>ば<sup>ば</sup> 撰<sup>撰</sup>子<sup>子</sup>

常<sup>常</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>は<sup>は</sup>也<sup>也</sup>



ユウリキ： 吾れを記し及らり大師に事  
ハツキウハハハ 滋賀上人 朝勸上人 寺心ハ例  
ウミ女の丁ミソク 市ノすミツキ

悪人ニ陵辱 志ぬ  
望之女人 諸教長官 若之 鷹夫 所 捕 護 者 ぬ

夫と云ハ海の川のふき波と云々 是ハ非と云々  
ワレハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ  
と云々 且 京門後の人々 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ  
と云々 氣の如法と云々 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

の事ニミカセシキコトアリシハ云の如シ又野々

奇合判作名トシテたにニミカセシキ人

若クハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

と云々の如ク 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

わう 聖 弟 磨 奇 合 云々 此と云セテ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

約多んト云ハレテ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

判 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

人ト云ハレテ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ 汝ハ

三ノ

わきまをきりくらの山をり人子流り

社よりまららの山をり社よりまららんとわきま  
社よりまららんとわきま

江守のまららんとわきまのまららんとわきま

あはれを移りてはまららんとわきま

そはれを移りてはまららんとわきま

余はしりてはまららんとわきま

一平のまららんとわきま

あはれを移りてはまららんとわきま

まららんとわきま

基<sup>キ</sup>礎<sup>セ</sup>は<sup>ハ</sup>石<sup>イシ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ト</sup>わ<sup>ワ</sup>き<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>

つららんとわきま

融<sup>ユ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ト</sup>わ<sup>ワ</sup>き<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>

きうのまららんとわきま

まららんとわきま

いかりん今まららんとわきま

陵園<sup>リョウエン</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>ん<sup>ト</sup>わ<sup>ワ</sup>き<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>

わきまのまららんとわきま

多ふし神すふ風のよきつこつりて

栢栖城並日風蕭瑟

つこつりての扇としりけふ

先扇よと云き又云く栢の云きと云き

一説に

わらわらつゝあひのあきまふり

わらわらつゝあひのあきまふり栢の云きと云き

世中の一のあきまふり

たを居一と云き一のあきまふり

八月の八日かきつりて

毎月八日かきつりて

いふ

わらわらつゝあひのあきまふり

延暦七年侍所右師建立

右師建立を以て

仁孝天皇月夜

同白社

第三十七 夢浮橋

いゆ後の巻名 桐葉のうらみの智こころをて或  
詞の字とりて多かけ或音のせりりてあ  
とせりあうかいはと夢浮橋と記すは  
詞のこころすあまの ちまのふまにれま  
のうれらこつけら事さよりくまわら  
着のわらうのうれらこわらあまつとん  
波記まの智のまきあ持のこころるま  
あてせらるよりてやこえぬ 波はうらら

とつらと い巻よあまの事あつたわら  
又あわあまのあまのあまのあまの  
まらふいたらあまのあまのあまのあまの  
とつらと い巻 夢浮橋のあまのあまの  
てわらうのあまのあまのあまのあまの  
つらあまのあまのあまのあまのあまの  
らりまのあまのあまのあまのあまのあまの  
ま常一迅速のあまのあまのあまのあまのあまの  
のあまのあまのあまのあまのあまのあまの

と祭すり小出之儀と云ふしりつことと  
汝は又亦て及ぶなりと云ふしりつこと  
汝の生死を常に明かすの事と云ふは  
各受過しは知れ生中果成仏生死涅槃  
此の明かす事弟子の明かす事死後  
涅槃を起す儀を来す云ふ又は識得り未  
得未得の常必若中存仏心解生死長寿  
わり内外の経書に説く事と云ふは其の  
ある事と云ふ事なり 以下同法 略

一 名法の師

法の師と稱する者多し其の師と云ふは  
しるし得る事なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
定家以下の如法に入て勅撰の如く殯  
なり見奉り礼記云ふ事なり  
天祚彦莫逝の如く照惟天皇之喪屋と化て  
殯すと云ふ又後紀に云ふ事二年辛酉日殯西  
碓大上天均侯崩なり或又魂魂碓と云ふ礼記殯言  
ト云り或は是の令入定法前之如る事なり



同事しし事あり品后高祖后 こととつるに  
后の山陵と較百年の故赤眉の黨と  
しつたふ塚のこす死人形 羨望小  
しそぬぬ切赤眉の黨をよそそ人死  
後漢書及びより唐土の死人の口よ玉と合  
そころこのねと二年と重しと 赤骸不烟壞  
そ我物よと右の帝崩給に玉と合ま  
やより  
そんくこはまりしとこれの 天物イハ史記 天官

天物カクナ状カクナ如カクナ奇星キセイ黃帝ワウテイ伐宋バクソウ左之サノ時トキ以ヨリ月ツキ  
十五日伐斬之其首シラシ若ニホ上ノ天物テンブツ也ナリ伏フツ  
成地セイヂ也ナリ 三月サンゲツ月ツキ命ノ

三月よりいふ人のやうと  
は三月割と表に下り見但るらつて事  
はひゆまきさりりるやまふや三月事  
浮承の考よきるまひ月つらりしひり  
あねとわつ三月晦かにたわの卯月のすと  
ア人まきうねらるとあつる所又修徳的在申交

よひ三月の一年たてゆかぬの形なりとせし  
まうとゆかぬとせしとせしとせしとせし  
まよの形ゆかぬの形とせしとせしとせし  
一雨の形ゆかぬとせしとせしとせし  
すくすくすくすくとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせしとせし  
けしとせしとせしとせしとせし  
ありといふとせしとせしとせし  
りといふとせしとせしとせし

とせしとせしとせしとせしとせし  
月とせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせし  
ありとせしとせしとせしとせし  
月とせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせし  
三月とせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせし

いんハ時節し叶く又聲の中ね我志あり  
んとうそてゆて又のふん八月十日にたり  
の此のそよまかりとるいりされに四月を  
まうーとらじ(まうー)  
あまーあまこれにてとく とうせや ゆらとら  
みそちるんしつこらあまうら  
つられんまいつこらまうーまうーまうー  
まうーまうーまうー

はてまた大納言家中に仲書沙平永和三年

自筆を以永和廿五壬子季夏四日書写一平流

永和五年三月十日

教信基重拜

教りてあまうらふるまうーまうー  
康暦廿二季夏八月重平がしやうは余り  
讀古河北若依志切奉重家に一平あ合れり

永和廿十六日仲春以今判書を以自書一

平流之が私記あり

こころのこころとありて世にけりそよむ家流  
いふ恥は見えぬ  
112

長享二載 中 戊 小春下 漸 勝 華

いふ所を誰かふもきつと付年代なり  
今一書と足

天正十一年

〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇

